

ある日

ヤン君のこと

津守 真

九月半ば過ぎ、急に涼しくなったころ、昼近

くから雨が降り、あたりが急に暗くなった。Y子がトランポリンの上でハーモニカを吹いていた。一緒にいた子どもが手を出し、Y子が手渡した。その子はハーモニカを放り、それが運悪くY子の頭にあたって、Y子は大泣きした。私はいろいろに慰めたが、いつもだとじきに泣き止むのに、今日は泣き止まない。私に抱かれて階段を上がりながらも泣いている。泣きじゃくりながら大好きな歌をうたい、長い間泣いてい

た。

この日は、皆がよく泣いた。学校の中でいつもだれかの泣き声が聞こえていた。

雨の止み間にA雄が裸で庭の水たまりの中を歩いていった。私が急いで傍らにゆくと、私の手を引いてあちこち歩き回った。そして、落ちていたホースを蛇口につけて欲しかった。私がホースをつなげ、A雄は水道栓をひねったら冷たい水が出た。A雄は急に激しく泣いた。お湯が出なかったからかと思ひ、ホースをお湯の水

道栓につなげようとしたが、うまくいかなくて A 雄は更にはげしく泣いた。私の背中におぶわられても、泣き止まない。あまり泣きつづけたので、担任が傍らにきた。

A 雄が私の背中からおりると、すぐに Y 子がまた私に何度も抱っこされたがった。最近はこのなことは珍しい。抱いているうちに眠ってしまった。じきに目を覚まし、私の顔を見て、にっこり笑い、また抱っこされたがった。その笑顔にじきにほだされてしまう。この日、子どもたちが帰ったあと、ホールの床に、若い職員までみんな座りこんでいた。

この日の夕方、私は小学校時代のクラス会に出かけた。同級生にヤン君というオランダ人がいて、卒業してから五十六年ぶりに日本にきたので、泊まりがけで話し合うことにしたのだった。長い間音信不通だったこの友人に、同級生

のひとりが偶然英国の国際学会で出会い、それがきっかけで、日本の大学に招かれることになった。現在はカナダの大学で生理学の教授をしている。第二次世界大戦をはさんで半世紀以上をへだて再開することができた不思議さに私共は興奮した。

彼が東京に来て最初に行きたかったのは、宮城で、それから楠木正成の銅像と泉岳寺、それから相撲見物だった。いずれも、小学校時代、遠足や見学で行った私共に共通の懐かしい場所である。忠臣蔵は彼が一番好きな講談であり、そのことから、関ヶ原の戦いは大坂冬の陣か、夏の陣かということにまで話は及んだ。私共の小学校の担任の小原先生が講談好きで、弁当の時間に私共は講談を話してもらうのが楽しみだった。私共がねだると国語の時間はしばしば講談にかわった。小学校時代がこんなに影響力をもっていることに私共はあらためて驚いた。

彼が友達だったために私共は青い目の外国人を恐れなかったし、彼は自分を異国人だと思ったことがなかったと語った。

私の個人的記憶では、彼は私の左後ろの窓際の席にいた。ヤン君の記憶力は抜群で、はじめは廊下側の出入り口に近い席だった。修身のS先生の時間に、「朕ま惟まフニ 我カ皇祖皇宗國ヲ肇はムルコト宏遠ニ 徳ヲ樹ツルコト深遠ナリ。我カ臣民克ク忠ニ克ク孝ニ……」と（ヤン君はそれを暗唱した）教育勅語が始まると、廊下に逃げ出した。それで窓際の席に移されたとのことだった。私はそんな話を聞くのははじめてだった。

一九三八年、昭和十二年に小学校を卒業したヤン君は、インドネシアを経由してオランダに帰った。ヤン君の父親は東洋学を専攻し、オランダ大使館の書記官をしていたが、ヨーロッパの大戦勃発とともにオランダに単身で帰国し、

一年後、ナチ軍オランダ侵攻のとき爆弾にあたって戦死した。彼にとつては小学校時代が家族と一緒に過ごした最後の時期だった。そのことが、小学校時代を一層懐かしい記憶としているのだろう。

半世紀以上たっても、彼の日本語は生きていた。彼は、オランダに帰るとき、十五巻の講談全集を持ち帰り、以来、五年毎にそれを読み返しているという。あの頃の日本語は読めるが今の本はだめだという。體操なら読めるが、體操だと読めない。

ヤン君と話しているとき、次第に話は教育と学問に及んだ。理学部との境界領域の基礎生理学を専攻しているヤン君は、現代は教育が普及し、知識の水準は上がったが、教育も学問も高尚高尚（nobility）を失った、何かのためではない、知のよろこびのために知を追究することをしなくなったと言う。私は、人間の実践の仕事

からも高尚さが失われつつあることを考えた。

話しているうちに、ヤン君自身の専門が人間の体温の基礎生理学であることが分かった。人間には体温を一定に保つコントロール機能が備わっているという考えがあるが、それに対して、彼は、体温は、気温や気候など、環境と微妙に関連していると考ええる。そこで、私は、この日、低気圧が近づいて、急に雨が降り、子どもたちが一寸したことで泣いて、泣き止まなかったことを話した。ヤン君はそのことに非常に興味をもった。そういうときは、衣服をとって裸にし、ぬるま湯を背中からかけるといいのだそうである。冷たい水ではいけない、ぬるま湯だと強調した。私共は生理学の観点から考えたことはなかったが、子どもを見てみるとそれ

が必要に思えて、知らずしてそのようにしていた。その日泣き止まなかったAくんにもそのままあてはまる。

その翌日、午後の飛行機で帰るというのに、午前中、同じ同級生のSさんの車で送られて、ヤン君は私の学校を訪ねてくれた。言葉少なに一緒に過ごした短い時間に、ひとりひとり違う子どもたちを教育するのはどうやって可能になるかと彼は言った。もはや十分に議論する暇もなく、彼の考えをそれ以上聞くこともできなかったが、私は、私共の小学校時代を思った。勉強も、図工も、體操も、先生が私共と一緒にやって下さった記憶がたくさんある、小さな私立小学校だった。

(愛育養護学校)